

『無の神学』講筈⑩ 第二部 無の神学への道

『無の神学』第二部 第三章「砕けの神学基礎論—終末の実存」

2003年3月16日（東京 新宿）

奥田 昌道

無条件にいただいている 一日一生 下り給う神さま 非連続の連続 砕けの神学基礎論 惨
憫たる自我 鉄壁の破砕 十字架の砕け 終末的現実 神の実存体たるイエス 終末の実存
法曹倫理の根底にあるもの

●無条件にいただいている

今日は、若い方々がたくさんお見えくださって本当に嬉しい。若い方、あるいは初めての方には、今日は『無の神学』というとても難しい本なんです。ただし、私は、お聞きになる方のそれぞれに応じていかようにでも易しくお話しすることができまので、ご心配ないように。私はいつも、集会でもそうなんですよ。来られる方の顔ぶれを見て、それに合わせて話をいたします。ですから、私の話しする集会には、どんな初めての方でも安心してお連れください。その方を基準にして、標準にして、お話しするように心がけております。あとになって、

「なんだ、先生、難しかったよ」

なんて怒られるかも知れませんが。

やはり、我々の福音というものはそういうものなんです。学問の話は、順番に積み上げていかないと、大学レベルの話をいきなり中学生に話しても、小学生に話してもダメです。けれども、福音の話というのは、まじめに聞こうという気持ちさえあれば、これは学歴、年齢を問いません。

何となれば、我々はどなたであつても、皆さん、無条件にいただいているのは空気です。空気は学歴、年齢に関係なく、無条件に吸っています。それからお水もいただきます。太陽の光を浴びるのも、どなたでも太陽の光を浴びている。今あげました、空気とか水とか太陽の光とかいうのは、我々にはなくてはならないものです。植物にでもそうです。よくいえば、そこへ栄養素があつて、そこにいろいろプラスアルファしていくことが大事ですが、基本的には、水と空気と太陽の光です。それから、自然に備わっているいろんな食物です。

福音の世界というのは、我々が生きていくということに一番深い関わりを持っている。今日も、小池先生の箇所は「砕け」がテーマになっている。前回は、「天路」という所を二回かかってやりました。今回は267頁の第三章「砕けの神学基礎論」、そして副題に「終末的



実存」という所です。こういうのを今の若い方がご覧になると、

「これは一体、何だ？」

と思うでしょうね。「碎けの神学基礎論」そして「終末の実存」という。

実は、小池先生の『無の神学』のやっていますことは、先生が神さまのこと、天国に関わることをいわば理論的にいろいろと追究していくという、先生の旅路の記録なんです。今日やります第三章、それから次にやります第四章「無教会神学論」、そこまでがいわば小池先生の信仰の旅路の前編をなします。後編は、1950年11月以降が後編になります。

先生は、1921年に先生のお兄様を失われて、人生のどん底を体験された。そして1923年頃に内村鑑三に触れられて、やがて藤井武先生に入門される。それが1925年です。1930年まで藤井先生の所におられた。1930年というのは内村鑑三と藤井武両先生が天に逝かれた。それから、10年間、塚本虎二とかそういう先生と一緒に聖書の勉強をしておられた。1940年からご自分のお宅で集会を始めた。これが「武蔵野幕屋」の誕生だった。10年間ご自宅で、羽織袴で集会をやっておられた——いつも羽織袴かどうか知りませんが——そして、1950年に一つの大転換が起こった。私がその前編と言いますのは、その大転換が起こるまでの旅路が前編、それから1950年以降が後編ということですよ。後編もまたいろいろ幾つかの山があるでしょうけれども、一つのもの貫いています。ハッキリ申しまして、後編から先生のお話はわかり易くなります。

前編のこのあたりは力み返っておられますね。無理して無理して——自分の中にある何かパトスが、情熱があるんです——それを人に伝えたいというので、絶叫調ですね、読んでいましたら。こんなに絶叫しなくても、もつと楽に仰ればいいものと思わせるくらいは美文調であり絶叫調なんです。後編になりますと、先生は柳に風といふかな、ヒラリヒラリと自由に燕が^{つばめ}大空を飛んでいるような姿、揺りかごがユラユラと揺れているような姿、それが後編に出てきます。前半の所は、身構えて「寄らば斬るぞ！」というような戦闘的精神に満ち満ちていますけれども、中身の方ではまだ円熟度が少ない。どうしても無理をなさっているというような印象を受けます。小池先生は、

「いやあ、偉そうなことを言っているな、奥田のやつは」

と思われかも知れませんが。この1948年は、戦争が終つたのは1945年ですから、その3年後に書かれた。先生は44歳です。だから44歳の若き先生を、70歳を超えた私が若干そういう偉そうな批評をしても、まあお許しくださるというふうにして、偉そうなることを言うんですけれども。正直、これを見ますと、そういう印象を受けました。

さて、「碎けの神学基礎論」とありますけれども、「碎け」というのは簡単なんです。たとえば、キリストの言葉に、

「二粒の麦、地に落ちて死なずば、ただ一粒にてあらん」

とあります。皆さん、麦はどうやって根をおろし育っていくか、ジャガイモがどのように



生長していくか、サツマイモがどうやってできるか、都会生活をやっている、御存知ないですよ。ところが、ちよつと田舎的な生活をしますと、わかるんですよ。麦は一粒まきますと、その麦の種が芽をだし茎となり、そして最後に実が稔る。その時に、もちろん種はどうなっているかという、影も形もないんですよ。要するに、一粒の麦が

「私は麦だ、絶対に誰の手も触れさせんぞ」

と言つてたら、これは生長してこない。ところが、麦はいわゆる「殻が破れる」という、とかいう、一皮むける、皮が破れる。そうすると中の生命が溢れ出てきて、そしてそれが生長する。生長して姿を変えていく。元の麦の形はもうないわけです。もしも、元の形を固く保とうと思いますと、それはそのままの姿です。けれども、それが破れかぶれと——

破れかぶれの開き直りだとかいって——そうやってグニャグニャになりますと、そこから素晴らしいものが出てくる。

人生もそうなんです。いろんな節目節目にムチャクチャにされて運命に翻弄されて、時には病気にかかったりとか、いろんなことがありますよね、人生とは本当に。肉親を失うとか、事故にみまわれるとか、いろんなことがあつて、もうムチャクチャな形にされてしまう。もうその時に天に召されてしまったら、一応それは終りなんですけれども。仮に地上に残っているとしますと、この地上に残っている私たちの生命、身体、それがいろんな体験をして、さっきの麦のように、「元の形はどこへ行ったの？」というくらいにグニャグニャになつても、見えない所で新しいあなたが、新しい自分というものがどンドン生まれていくんです。変貌しながら生長していく。そういう始めのものがつぶれて、それから新しいものが出てくるという、その姿を「碎け」というふうに言っていると思つてください。

私は子供の頃に庭にジャガイモを植えてました。「食料増産」という。いや食料増産どころか、自分の食べるものをつぶして植えるわけです。ジャガイモを四分の一位にして植える。すると芽が出てきて、やがて5月頃になると、新しいジャガイモが出来上がるんです。そして引っこ抜くと、元の親イモ、種イモというのはもうグニャグニャに、全然形がないくらいになつている。でも美事に新ジャガの赤ちゃんのジャガイモが五つも六つもその周りにコロコロ出来上がっている。そういうことがあつた。

ですからやつぱり、我々の人生も、絶えずいろんな試煉にみまわれながら、どれだけ皮を脱いでいくか、脱皮していくか、元の固いものがつぶされて、柔軟なものになつて、そして新しい生命に変貌していくか。歳をとるといふのは決して悲しいことではないですよ。いくらでもそれをやっていって、それからいわゆる高齢というものを迎える。どういう人生が悲しいかというのは、そういうことを味わわないで、元の姿のまままで自分をどこまでも守り続けようと思つていると、段々段々、頭が硬化してくる。骨は固くなりもろくなる。そして、希望がないわけですよ、将来に向かつて。私なんか希望満々です。年齢からいう



と70歳です。人生ということからすれば、ほぼこの世での仕事が終わりにかけていると人思いうわけです。ということとは、そういう意味ではもう、

「あれをやらねばならない、これをしなければ自分の生きていく値打ちがない」

とか、そういう煩惱ぼんのうからはもう解き放たれている年齢です。それでいながら、次の新しい仕事次から次と自分の所に持ってこられるんです。

「ぜひ、これをやってください、あれをやってください」

「はい、私でよろしいでしょうか？」

「ええ、是非、先生にお願いします」

「では、やらせていただきますよ」

と。全部、向こうから来る。それは人間から来ますよ。けれども、私の心の中では、

「これはキリストさまが私に授けられた仕事だ」

と、そう思った。だから、全然その止まるとどところを知らないわけです。そして、この地上の生涯があと私は30年ほど載っているのか、もつと短いのか、全然知りませんが、待っている所は眩まぼゆい天国ですから、そこにはいろんな方がいらつしやいますよ。もちろん小池先生もいらつしやるし、一番、御許にはキリストさまがいらつしやる。キリストさまにお会いした時に、

「うん、君、よくやったよ！」

と。これが欲しいんですよ、この言葉が。「君、よくやったよ」と。向こうへ行った時に

「ほう、来たか、そうか」

そんなんだったら、さびしいですよ。

「おお、君、よくやったね、待ってたよ！」

とか、そういうふうなものではなくては。我々は親しい方にお会いした時でもそうやって、

「よくやったね、会えてうれしいよ」

とか言ってお互い握手して頬ずりしてという間柄、これが私はうれしいわけです。

そういうものが、向こうにはある。しかも「それはいつ？」ということとは全然決められていない。これがまた妙味なんですよ。

● 一日一生

小池先生の好きな言葉に「一日一生」とか、「非連続の連続」という言葉がある。この言葉はどうぞ覚えて帰ってください。このことをしっかりと認識し自覚しておれば、まず人生の眩つぶやきがかかりへります。人間はなぜ、たるむのかというと、連続を考えているからです。

「今日、集会へ行かなくても、また来月がある。今週の集会を休んでも、また次の

日曜日がある」

と。そういう「また次がある、また次がある」という、同じように続いていく。これが連



続ですね。そうすると、人間はたるむんです、「別に今でなくてもいいや」と。そうでしょう。ところが、実はこれは明日になったら連続しているみたいだけれども、現在時点で考えたら明日は確かではない。我々の人生は、決して明日を約束されていない。「明日は絶対に大丈夫」という人はこの中にありませんよ。もし、

「私に限って明日は大丈夫」

という人があつたら、神さまは怒りますよ、

「それを決めるのは私の役割だ」

と。人間は自分で自分の生涯を、明日を、明後日を決める資格はない。もし明日も明後日もその次の日も、やはり今日のように元気で過ごせるとしたら、それは神さまが特別にお守りくださって、あらゆる災いから護ってくださるから、それでそういうことになるんだということですよ。それを案外、人は分っていない。

いろんな事故が起こるでしょ。「管理責任者は誰だ！」とか。ビルが崩壊して、壁が内側に崩れなければならぬのに、外側に崩れ落ちた。科学的に分析すればその通りなんです。「管理責任者は誰だ」と。でも、そんなことを言ってみたって、歩道を通っている人は、上から壁が落ちてきて、犠牲になった人にとってみたら、責任を追究したって何にもならない。その人にとつては、正に不幸な出来事であつたというだけです。

そういうような事故のことが、新約聖書の中でキリストの言葉にあるんです。

「⁴又シロアムの櫓^{やぐら}たおれて、^お押し殺されし十八人は、エルサレムに住める凡^{すべ}

ての人に勝りて、罪の負債^{おいめ}ある者なりしと思ふか。⁵われ汝らに告ぐ、然らず、

汝らも悔改めずば、みな斯^かのごとく亡ぶべし」^{（ルカ13・4〜5）}

と。シロアムの塔が倒れた。そして18人が下敷きになって死んだ。その事を知ったキリストは何と仰つたか。

「あなた方も祈っていないと、いつそんな目に遭うかわからないよ」

ということを言っておられる。シロアムの塔が突然倒れた。たまたま下敷きになって死者がでた。あなた方も祈り続けていないと、そういうことになるかも知れないよと。いや、祈り続けていたらそういうことが起こらないかというのと、これも保証はありません。私たちは明日をも知れない身なんです。どんなに自然科学の粋^{すい}を極めてそれを組み合わせても、やっぱり限界がありますよ。スペースシャトルは地上へ突入する前に分解してしまいましたが^{〔註…2003年2月1日、宇宙船スペースシャトル「コロンビア号」が大気圏に再突入する際、空中分解した事故〕}。その他、諸々のどんなに科学の粋を極めて、それを全部つないでいっても、それはやっぱり何か事故が起きたりする。いわんや自然現象なんていうものは、我々の予測を超えた動きをします。けれども、キリストは何と仰っているか。

「²⁹二羽の雀は^{すずめ}一銭にて売るにあらずや、然るに、汝らの父の許しなくば、その一羽も地に落つること無からん。³⁰汝らの頭の髪^{かみ}までも皆かぞえられる。³¹こ



の故におそるな、汝らは多くの雀よりも優るるなり」（マタイ10・29〜31）

「二羽の雀も父のみ許しなれば地に落ちることはない。あなた方は雀よりももっと素晴らしい、神さまに愛されている大事な神の子供だ。だから、神さまに信頼しなさい。大丈夫だ。明日のことは思い煩わなくともよろしい。」

と。明日のことがわからないということをお前提にして、

「けれども、私が護っているから、あなたは心配いらん、大丈夫だよ」

という、非常に矛盾したことでしょう。矛盾したことなんです。私はキリストにお会いするまで——何も肉眼でお会いしたのではないが——キリストのことを教えていただいて、キリストさまにすぎるようになる前は、人生何が起るかわからない。ケラケラ笑っている奴はみなバカだと思った。明日何が起るかわからないで、今日、ケラケラ笑っている。私はそんなことはとてもできない。そういう非常に醒めた思いと不安と心配事があって、心から笑えない。ところが、キリストの所に行ったら、

「明日のことを思い煩わなくていい。私が責任をもつから」

と仰った。キリストさまが「私が責任をもつ」と言われる。これは凄い。この変転極まりなきこの無常の世の中で、

「私が絶対に責任をもつ」

と仰った言葉の重さ、それに私は賭けた。それからはもう心の小波はピタツと止んだ。不思議ですね。そして、小池先生は、

「非連続の連続だ」

と仰った。だから、今日一日というのは本当に天から、神さまからいただいた尊い一日です。神さまに支えられて、その力に守られて、今日いっぱい精一杯やろうと思った。そういう一日一日の積み重ねで、どこで終わったっていい。どこで終わっても、私はキリストに

「いいえ、まだ0.5しかやってません」

「あとの0.5は私がやってやる」

とキリストは仰る。

「お前のあとはまた私が然るべき人を選んで、やらせてやるから。お前はそれでよろしい」

と。キリストに出会うということは、そういうふうな人生に対する見方がガラツと変わります。しかも、そういうことを言いますと、

「あ、人は考え方でそんなに変わるものですか？」

と、こういうふう言われる。考え方で変わるほどこの人生は生易しくはありません。実力の世界です。その

「実力を持っているのは誰か？」

と、それが問題です。人間に対してそれを期待して注ぎ込んだって裏切られます。金を積



んだって裏切られます。変な宗教に金を注ぎ込んでも裏切られます。キリストというお方は「金をだせ」とは仰らない。キリストというお方は、「あなた自身が欲しい」と仰る。

「あなたが欲しい。私にあずけてごらん。そしたら、あなたの人生は素晴らしいものになるから。どうだい、やってみるか？」

と、こういう入門テストですよ。いろんな入学試験がありますけれども、キリストの入学試験、入門試験というのは物凄く簡単なんです。

「どうだ、私に全部任せるか、それとも『いえ50%にしておきます』と言うか？」

と。キリストというお方は、50%とか70%なんてお嫌いなんです。「オール・オア・ナッシング」(all or nothing すべてか全くの無か)なんです。そして、「全部任せる」なんて言うのと、たいていの方は、

「そんなことして大丈夫なの!？」
という。

「失うものも何もなくなくなったから、大丈夫だよ」

と。「あれが欲しい、これが大事だ」と、しがみつくものがたくさんあれば、そんな簡単に「すべてお任せします」なんて言えない。でも、もう生きていくのが辛くて辛くて、朝目覚めるのが辛い。そういう人間にとっては、それこそ

「私に任せたら大丈夫だ」

と言つてくださる方に出会った時に、私はもうしがみついたですよ。ジャンプ一番、

「たのみまーす!」

と言つて。非常に単純です。23歳の時、そうやってキリストの懐に飛び込んでから、いろいろそのあとと迷いがあった。キリスト教の世界というのは、いろいろ誠律がダーツと並んでいる。これは大変だと思った。しかし、小池先生というお師匠さんにめぐりあって、

「うん、そんな誠律かいりつは、キリストは出来ないことばかり言ってくるんだ。要は、

『出来ません!』ということ言わせたいんだよ。』とつても出来ません』と言

つたら、『そうか、そんなことはわかっているよ』とキリストは仰る。『私がやらせてあげる。私がやらせてあげるから』と。たとえば、人を憎んではならないという。そんなもの自分でやっごらん。人を憎んではならないなんて誰もできない。

『私に弟子入りして、私の心になりなさい』と。キリストの心が私の中に入ってきて、私自身がキリストの心の持主になってごらんください。キリストは憎まない人です。

敵のために執り成す、祈りの人ですから」

と言われた。今、臓器移植というのがはやっています。人が臓器を上げるといふ。キリストはご自分を私に下った方です。キリストは十字架でお亡くなりになった。病気で死んだのではない。十字架で殺された。なぜ殺されたか。キリストは当時の宗教を改革しようとした。自分が自分のままで、人間が人間のままで神の如くなるうとして、人間は頑張った。



その思い上がりキリストは厳しく批判された。それで当時の正統的な宗教家たちによってねた妬まれ、民衆を煽動して、キリストを十字架に付けて殺してしまった。キリストは、

「私を見た者は父を見た。私は神さまに遣つかわされてこの地上にやって来た。私は自分から何も言えない。神さまが私の中で『言え』と仰ることを言っている。『為なせ』と仰ることをしている。私は神さまの、まあいうならばロボットみたいなものだ。私は空つぽだ。私が空つぽだったら、神さまという素晴らしいオール（全）が入ってきた。私はナッシング（無）だ。私がナッシングとなったら、神さまというオールが入ってきた」

と。そして、手当たり次第に何でも出来る。それは「我が意志」でやっておられない。神さまが、オールなるお方がどんどんキリストを通してなされるんですから、素晴らしいことが起きてくるわけです。そうすると、当時の宗教家たちが妬んだ。それでキリストを殺してしまった。キリストは、

「私は人々の罪を背負う」

と仰った。神さまの恵みを恵みとして受けとれない人間の自我、逆らう心、それが人間の癌なんです。それが根っこからつぶされなければ、いくら道徳的な修養を積もうと、神の知識を詰めこもうと、根っこが腐っていますから、ろくなものが出てきません。一番深い所から全く新しく、キリストご自身の中にあるものを私の中に植えつける。私の中に植えつけるためには、私を掃除しないとけません。十字架で掃除してくださいました。

「へえ、そんなことがあるの？ 十字架とはそんな凄いものなの？」

と、皆さんは仰るかもしれません。そうですね。十字架は私たちの、

「砕けようにも砕けない固い自我、それを見てごらん。十字架であなたは砕かれてしまっているよ」

ということ。

「ああ、そうでしたか。私は、砕こう砕こうと思って、砕けないで困ってしまいました。けれども、あなたが十字架で砕かれて、同時に私をもそこで一緒に砕いてくださったんですね」

「そうだよ、あなたを愛しているから。私が十字架にかかった時に、あなたも一緒にそこで十字架にかかっていたんだ。砕けられないあなたが砕かれている。だから、大丈夫だよ」

と。キリストの言葉はいつも、

「大丈夫だよ、大丈夫だよ」

と、それ以外にない。そして、私をきれいに掃除して、台風一過、美事に私の中を掃除して、今度はキリストさまが中に入り込んでくださった。

「あなたはもう十字架で死んでいる。心配いらん。今度は、私があるの中で生き



るんだから」

と。まぎれもない私という人間が生きているんですよ、奥田昌道という個性が生きている。それでいながら、質的にキリストの質が乗り込んできたから、もう大丈夫だと。

「もう、あなたは絶対に大丈夫だ」

と言われたら、

「そうですか。それでは、余生をあなたのために使わせていただきましょう。何をすればいいですか？」

「あの人を助けてやれ。この人を助けてやれ。天国のことをもつと教えてあげろ」

「はい、わかりました。地上にあるかぎりはやります！」

と。しかも私の「やります」というのは、日常生活を通してです。これがまた大事なんです。私はいわゆる専業牧師ではない。普通の職業に携わる普通の生活です。その普通の生活の中にことごとくキリストの御業が現れていくという、そういうことなんです。

●下り給う神さま

皆さん、人生いろいろ自分で、自分の足で立とうと思つて努力されたときに、必ずいつもぶつかるものがある。不思議ですよ。たとえば、勉強しようと思うと、勉強とスポーツは両立するか。身体を鍛えたいからスポーツをやるうか。いや、頭の中がお留守になりそうだから勉強をやらなくてはとか。私は高校時代から運動部に入らなかった。運動部に入つて、それをやるとうクタクタになつて勉強ができなくなる。だから、自分で勉強をやりながら、自分でスポーツを心がけました。

恋愛と勉強は両立するか。どうですか。勉強しようと思つたら、あの人のが思い浮かんできて、「あの方は私のことをどう思つてくれているかな」とか。そういうことが常に心配になつてくる。そうすると、心ここにあらず。「いや、勉強しないといかん」と。これはなかなか両立しがたいですね。

世の中は、両立しがたいものがいっぱいあるんです。両立しがたいものの中で、何とか生きているのが人間の実生活だと思えます。結婚してみたらすべてがうまくいくかと思うと、とんでもないですよ。それぞれみんな、旦那は旦那で自分のやることがある。奥さんは奥さんで自分のやることがある。旦那がクタクタになつて帰ってきたら奥さんは、

「私、疲れたのよ。手伝つてー!」

「俺もクタクタだよ。そうか、お前はそんなやつだったのか、知らなかったよ」

とか言つたり。今だつてそうでしょ。女性だつたら、結婚と職場、仕事をどう両立させるか。育児と何々を両立させるか。嫁さんと姑しゅうとめとの関係とか。大家族でなければ気楽でいいですよ。ところが、子育てになつてごらん。大家族だつたら、おじいちゃんやおばあちゃんがいて、それぞれ子育ての秘訣を教えてください。また面倒をみてくれる。ところが、若夫婦



ただだったら、それはもう若いお母さんはノイローゼになる。旦那は昼間は外におります。若い奥さん方はひとり閉じこもっています。もう24時間、子供を相手にしている。その息苦しさというのは大変なものだということを、私は家内からずいぶんあとになって聞かされました。

だから世の中に、理解ある奥さんなんかおりませんよ。それは理解あるふりをしているだけで、どんなに本当に奥さんがしんどい目をしているかというのを、世の夫はわからない。また、奥さんにしても、旦那が

「外に出れば七人の敵がおる」

と言われているが、そういうことはやっぱりそういう生活をなさつてないとわからないでしょうね。私らみたいに学校の先生とか、ある程度独立した職業の人間はまだいいけれども、もう来る人来る人に頭をペコペコ下げないと首になるような仕事をやっている人は、どんなに辛いのか。罵られても罵り返さない、キリストのような姿で生きないと、世渡りできないわけですよ、男は。罵り返して「バカヤロー！」と言ったらもうくびです。

「いや、こいつ(客)がけしからんですよ」

と言つても、上司からしたら、

「お客様は神様ですよ、このバカッターが！」

と言われてもしょうがない。そういうのが世の中なんですよ。こういう世の中で本当に、それこそストレスを感じ、胃潰瘍にもならないで、ノイローゼにもならないで、やっていくというのは至難のわざですよ。そうでしょ。それでついつい、息抜きでパチンコに行つてみたり、何か他のいかがわしい所に行つてみたり、酒にひたつてみたり、賭け事をやってみたり。そしたらもう、家庭はメチャクチャになりますよな。

まあそんなことで、つまらん話をしてもきりがありませんけれども、我々の生活というのはそういう現実の中にある。その現実の中で、しかし、絶えずこの世の春のような顔をして、私は小池先生みたいに

「楽しくてしょうがないよ」

なんて、そこまで啖呵たんかをきる自信はないけれども。しかし正直、このキリストというお方と一緒に生活させてもらおうと、

「たとえ夜もすがら泣き悲しむことがあつても、朝とともに新しい希望の光が照つてくる」

と、詩篇にありますね。そういうのが段々段々、実感できますよ。人間の思いで、

「もうこれはダメだ」

と思うのが、いつかパツと道が開けてきたり、思わぬ所で思わぬプラスのことが起こってきたり。そういうことを経験していきますと、いろんな難しい壁が立ちはだかつて、

「私についている方はすごいんだ。その方が今度はどんなふうにも道を開いてくださ

るか、こっちは惻々として楽しんで待とう」

ということになる。旧約聖書を繙いたら、正に神さまはそんなふうにはイスラエルの指導者を導いておられた。たとえばモーセ——あの「十誡」の映画なんかで御存知でしょ——あの紅海を渡って行く時に、後からエジプトのパロの戦車が追っかけてくる。前は海でもう絶体絶命。その時にモーセは手を挙げて祈っていたら、バーツと海が二つにわかれて、イスラエルの人たちはそこを渡って行った。渡りきった所へパロの戦車が来たら、水が元に戻って、全部水にのまれて死んでしまった。その時に神さまはモーセに何と仰ったか。

「私がこれからしようとすることを、目を見開いて見ておれ！ お前は何もしなくていい。お前はただ手を挙げていればいい。私がやるから、私のやることを見ておれ！」

「というのが神さまなんですよ。それが、
「そんなのは、見ておられません！」
というのが人間なんです。」

「そんなもの信じられますか！ 向こうを見てください。敵が迫ってきますよ！」

と、絶体絶命、背水の陣です。その絶体絶命の時になお神さまに、

「あなたは凄いい方です。あなたは必ず勝ってくださいます！」

と言って、ドーンと坐っているような魂になったら、その通りのが起こってくる。そうしたら、余計な心配は無駄だったということになる。

人間は無駄なことをいっぱいやっている。大体、皆さん、思い煩いが多いですね——私を含めてですけれども——あとになってみたら、あれは全部無駄だったと。だから、キリストを信じて生きる生き方は、シンプルライフ (simple life 単生素朴生活) ということ。必要なものだけ。たくさんやらねばならない事があっても、その中で「今日はこれ」という、欲張らない。「今日はこれ」と決めたら、それだけやる。

私は風邪でフーフーいいながら、この第6巻〔キリスト告白録第6巻『心安かれ』2003/5刊〕の序文だけを一日がかりで書きました。もちろん校正の文章もサーッとおさらいをしましたけれども。それだけをした。……

私たちは日常生活の中にキリストがくだって来てくださるんです。昔は、自分がよじ登って行って神さまを捕まえたんですよ、「ジャックと豆の木」みたいに。ところが、有り難いことにキリストという神さまは——大体、天の御座を捨てて地上に降ってきたのがキリストマスでしょ——地上にくだって来て、いろんな善いことをなさって、そして最後は天に昇られました。昇られたけれども、昇りつ放しではない。

「あなた方は祈って待っていないさい。私は必ずまた霊となってくだってくるから。聖霊という霊となって、火の如き霊となって、あなた方一人ひとりの中に下ってくるから」



と。下り給う神さまなんです。人間は全部、上昇志向で、上へ昇りたい。けれども、神さまは下りたいんです。下らない神さまはダメな神さまなんです。下る神さまはいい神さまです。下ってきてくださる。

だから、私たちはベッドの上に寝たままでも大丈夫です。どんな姿かたちでも、そんなことはどうでもいい。心のすがたです。

「イエスキさま、私の中に入ってください。私はあなたをお迎えいたします。降くだってきてください」

と。そして、いつペン降ってくださいたら、もうそこにドーンと永久居住。キリストは永久に私の中に居住してくださるんです。私が「いやだ！」と言って追い出せば、これは別ですよ。でも、私が喜んでキリストをお迎えしている限りは、キリストの方は絶えず、ドーンと坐つてもう動かない方なんです。私はハッキリと聖書の御言を援用できます。

「あなた方は神の宮である」

とパウロは言いました。キリストは、

「二、三人、私の名前の中に、私の名において集まる所には私もそこに居る」

ということを福音書で約束された。これが「教会」というものの本来の姿なんです。

「二、三人、キリストさまの御名みなによって集まってくる所には私もその中に居る」

と。それが「二、三人」であろうが、「二、三十人」であろうが、「何百人」であろうが、関係ありません。パウロは、

「あなた方は神の宮である。聖霊の宮である」

と言った。この「エクレシヤ」というのは「教会」と訳されています。神さまが呼びかけ、呼び集められた群れ、キリストが呼び集めてくださった群れ、というのが「エクレシヤ」です。それを日本語では「教会」と訳しました。小池先生は「召団」「召されたる者の群れ」と仰った。そういう「神の宮」、聖なる場所であるという。それから、パウロは、

「あなた方一人ひとりには聖霊の宮である。あなた方の体からだは神さまが十字架で贖いとして潔めてくださった尊いもので、そこに聖霊という、キリストの霊が宿り給う。あなた方一人ひとりが宮である。だから、これは尊ばないといけない。自分のものではない」

と。旧約聖書の世界は、「エホバの神殿」というものに物凄あこがく憧れたんです。

「悪の幕屋に居るよりは、エホバの宮の門守かじもりとなりたい」
と、詩篇84篇で言っている。

●非連続の連続

今でもそうです。伊勢神宮があり、明治神宮があり、いろいろなお宮さんがあって、人は



宮詣みやもでに出掛けます。お正月になりますとお宮参りに行く。私たちは自分自身が宮なんです。あなた方一人ひとりが宮です。だから、外へ出掛ける必要もない。内なる聖霊さま、内なるキリストさま、その方を拝みなさいと。お祈りというのは、私たちは確かに

「天にいます我らの父よ！」

と天に向かって祈り、また、父の御座にいますキリストに向かって、「キリストさま！」と祈る。これも一つの祈りです。同時に、

「わが内なる主さまー！」

という祈りも立派な祈りなんです。

「わが内に宿り給う御霊の主さま、ありがとうございます。今日も新しい一日を送ってくださいます。ありがとうございます。今日も元気に目覚めることができます。ありがとうございました。」

と。そういう内なる主さまにお祈りするというのは、これは力む必要が全くない。

「主さま、ありがとうございます！」

と。そしたら、この内なる主さまが、天界にいるキリストさまに向かって絶えず執り成してくださっている。

「御霊、自ら言い難き呻きをもって執り成し給うなり」

「私たちはどう祈っていいかわからないけれども、内なる御霊が天なる神さまに執り成して祈ってくださいている」

と、ちゃんとパウロのローマ書8章26節に書いてあります。そして最善が成る。すべてのことが相働きてプラスになる。どんなにマイナスと見えることも全部プラスに変わっていく。物凄く前向きなんです。どんなマイナスもすべてがプラスに引っくり返ってしまう。そんなふうには、私たち「罪びと」としか言いようのない者は——罪びとはお宮さんに参れないんです——お宮さんに参ろうと思つたら、先ず身を潔め犠牲きさげものの献物けんぶつをして、

「こんなものですねけれども、お祈りを聞いてください」

と言って、それからやつと宮詣みやもができるわけです。ところが、我々はキリストさまが潔めてくださいました。

「あなたは潔い。私があなただの中に宿っている。大丈夫だ、心配いらん」

「はい、ありがとうございます。主さま、ありがとうございます」

と。「主さま、ありがとうございます」以外に何も言葉がない。そういう主さまが一人ひとりの中に内住して、そして御国が到来する日までずうつと非連続の連続で、一日一日を生かしてくださる。こういう生き方を小池先生は語っておられる。

先生は「終末の実存者」とよく言われます。「終末」というのは二つの意味がある。我々の人生は絶えず「死」という終末に向かって歩く。「オギャー」と生まれた時からもう死に向かって歩き始めているんですよ。だから、



「^{かどまつ}門松は冥土^{めいど}の旅の一里塚 めでたくもありめでたくもなし」(一休の狂歌)という。一つ年をとるごとに死という終末に人間は向かっている。しかもそれは、「百年保証する」という保証は何もない。だから、生命保険というのは成り立つわけです。

「いつ死んでもこの人にはちゃんとお金がいきます。終りまで生きても少しは差し上げます」

という。必ず人生というのはどこかでピリオドが打たれます。しかも、「いつ」ということは決まっていない。そういう意味で、我々の人生自身が死という終末に向かって歩いている。非連続なんです、一日一日が。非連続の連続なんです。そうすると、生き方が変わってくるんですよ。「当然あと10年間あるんだ」とか、「当然、線路はつながっている」とか、そう思う。

線路だってあれはつながっていない。「ゴトン、ゴトン、ゴトン」と音がしますね、あれはレールとレールの間に隙間を作っている。夏になると膨張してくっついてしまう。冬になると縮んで空く。それを北海道から九州までつないだら、何キロにもなるような隙間がある。それを細かくちよつとずつ空間を作って、それで「ゴトン、ゴトン、ゴトン」と電車が走っている。あれは非連続の連続ですよ。

まあそういうことで、人生は非連続である。そういうことを認識した上で、しっかりと生きようという。この「実存」というのは人間の生き方ということ。そういうふうに見えるにいただいたらいいですね。それから、

「終末には二つの意味がある」

と言いました。もう一つは何かというところ、この世自体が、この世界自身が終る、「神の国が来る」という。この地球が始まって、やがて地球の終りが来ます。地球も有限ですから。「これは神の創造になる」と聖書では言われているけれども、しかし、必ず始めがあれば終りがある。

「終りは天体が焼け崩れる」

とか、そんな表現でペテロ書なんかでは書かれている。ヨハネ黙示録なんかを見ましても、キリストの姿が凄い姿で描かれていますね。何か角^{つう}があったり、凄い姿で象徴的に描かれていますけれども、必ず終りがくる。つまり、最後の審判です。よく「ノストラダムスの預言」なんて言われましたね、「1999年に終りが来る」とか。あんなのはみなウソです。人間の側で「何年」なんて決められない。それは神さましか御存知ない。キリストさまも、

「私は知らない。父の御意^{みこころ}の中にだけある。しかしながら、明日にもそういう

世の終りが来るといふ気持ちで生きなさい」

ということを仰った。キリストの言葉はそうでしたよ。

「あなた方の中には、私が再び来るときにまだ生きている人がいる」



と、そこまで仰った。だから、

「明日のことを思い煩うな。今日一日を精一杯生きなさい」
と。パウロも結婚のことでそういうことを言っている。

「明日にも世の終りがきて、キリストさまがおいでになるかもしれない。それなのに、若い乙女たちが結婚して、旦那のために心配りしている間に、キリストが来られたらどうするの？ どうしたって、乙女は好きな人ができて、好きな人に没頭したら、神さまはあっちへそっちのけにされる。そういうことよりも、今しばらく辛抱して乙女のままでキリストをお迎えしようではないか」

というのが、パウロさんの勧めすすであって、決して結婚反対ではない。あなた方のためを思って言っていると。そのくらいにパウロさんも、

「世の終りはすぐにでも来る」
と信じておられた。それは現実には延びました。けれども、量的には延びましたけれども質的には、

「明日にも終りは来る」
というその気持ちで今日を精一杯生きなさいと。ルターは、

「明日、世の終りがきても、やっぱり私は今日、リンゴの木を植える」
と言った。

「明日、終りが来たら、リンゴの木はどうなるの？ 苗はどうなるの？ 全部、御破算ではないの!？」

と。でも、そんなことは思わない。その日その日、精一杯やったこと、それは天国で必ず祝福される。そういう思いで生きた。ですから、決して投げやりな生き方はしない。いよいよ、しつかり生きる。そういう生き方のことを「実存」といいます。

「実存」という言葉は——「存在」というと、何か物理的に生物学的にそこに横たわっているというもので方向性がない——ところが、「実存」ということになる、人間は意志が働くわけです。人格の生き方というのがそこに出てくる。どういう生き方をするか。あの頃、実存哲学というのが物凄くはやったものですから、先生の言葉に「実存」という言葉が凄く出てきます。今ふうに言えば、「生きざま」です。「あの人の生きざまに学ぼうではないか」とか、「あの人はどんなふうな生きざまをするのだろうか」とかいう。

ひのほらしげあき
日野原重明〔医学博士1911～(2017)〕さんという方がいる。92、93歳で今でも現役のお医者さんですよ。あの方は素晴らしいと思いますよ、クリスチャンです。……日野原先生にとっては、自分の人生は自分のものではないと思っている。神さまに献げたものと思っている。そういう献げたものと思っている人を神さまは使いたくしてしょうがないから、ピンピンしている。そういうものなんです。そういう実存です。



● 碎けの神学基礎論

今日の第三章からのことは、そういった中身です。「終末的実存者」というのが本来の論文の題名でした。それを先生は「碎けの神学基礎論」というふうに変えられた。

先生の神学の一つの特徴は、この「碎け」ということを物凄く大事にされた。それまでは、きたもりかぞう北森嘉蔵(1916～1998)という神学者が「神の痛みの神学」ということを言われた。私は読んでないけれども、いろいろ耳にするところによれば、十字架でキリストが苦しみました。これは神さま自らが十字架で苦しんでおられる。神さま自らが痛んでおられる。そういう神さまご自身が悲痛な思いをして人を救おうとしておられるという面を強調された。それに対して小池先生は、

「いや、痛みどころではない。碎けだ」

と。「痛み」というのは何か生理学的な感情的な把握です。それに対して、「碎け」というのは実存的な把握だと仰る。自分自身がつぶれてしまう。神さまはご自身をつぶして、そして我々を救おうとされる。我々自身は、自我という「我」がというものがある。

『神さま』？ そんなものは要らないよ、私は無神論者です！」

と、そうやって威張っている人がある。「お気の毒に」と私は思っている。

「私は誰にも頼らない。私は自分で生きていきます。神さまなんて要りません。神に頼る人は弱い人です。私は強いんです」

と、そうやっている人がある。大体、「無神論」なんておかしいんですよ。論理で何になるんですか、そんなもの。自分でどこを捜しても、「神は見つからなかった」というだけの話なんです。始めから神さまなんて見えないんですもの。神は霊だということですよ。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真まことをもって拝すべし」

という。無神論者の方に聞きたい、

「あなたは、魂はないんですか？ あなたは、霊はないんですか？ 慰霊祭なんて

いうのはナンセンスなんですか？ 黙祷なんてナンセンスなんですか？」

と。多分、その方も「霊は信する」と仰るんでしょうね。「人間は単なる物質だ」とは思っておられないと思う。けれども、霊は信するけれども、それはどこまでも人間の霊であったり、動物の霊であったりする。神さまという、人間とは別の凄い、しかも創造主であるような霊、そういう神、そういうものは嫌だと。それで、人間のレベルの霊を、てんじん天神様すがわらのみちざね菅原道真公、あるいは明治神宮、そういうふうな形で、人間の少し偉い人をお祀りする。そこへ御参りに行く。これはお仲間さんですから、きつと認められると思う。けれども、

「聖書が言っているような神さま、そういうものは私の概念にはない」

というのが、無神論という方のきつと言いたいことなんだろうなと思う。だから、私はそれに対して、

「あなたは御存知ないだけでしょ。どこを捜したって、神さまなんて在りっこあり



ませんよ。でも、その方が『私はここにいるよ』と言って姿を現したら、あなたは どうする？ 腰ぬかしますよ」

と言う。旧約の世界だったら、もう直ちにその人は焼け死にますよ。高圧電流みたいなものですから、神さまの霊というは。キリストはやさしいんですよ。キリストは変圧器みたいなもので、神さまの高圧電流を人間に合うようにやさしくトランスレイト（翻訳する、移す）して、我々のわかるような言葉で語ってください。神さまがわからない我々に神さまを示してください。お方がイエスというお方ですからね。キリストも、

「私を見た者は父を見た。私を通らなければ誰も神さまなんか知りっこない」

と仰った。ですから、「無神論」とかいうのは、本当に大したことはありません。皆さん、気になさらないでください。「無神論です」と威張る人があるので、おかしいですよ。私からいうと、無知をさらけだしているだけです。空の中に魚を捜しているようなものです。魚は水の中、鳥は空。神さまのいらっしやる世界と、人間の住む世界とは違う。人間世界だけで神さまを捜したら、いないよと。でも、人間世界でも神さまの栄光は現れているんです。

「大空は神の栄光をあらわし……」

とか言われていますでしょ。

神さまご自身が碎けていらっしやる。キリストが神さまの側の碎けです。我々人間の側は自我、これが碎けない。煮ても焼いても食えない。この人間の頑なさ、これは少々の悔い改めではどうにもならない。

「このどうにもならない、碎けようとしても碎け得ない人間に、ご自分の碎けを『さあやるよ』といってください。それが十字架だ」

と言うのが小池先生なんです。この「碎けの神学」すらも、この段階ではまだそれが八分目位までできているけれども、最後まで行っていない。非常に自分の側の碎けということを強調しておられます。

「自分が碎けよ、碎けよ、碎けよ」

と、こう言っておられる。けれども、先生がああ1950年に突破されてからは、碎け得ない私を碎いてくださったのが十字架である。キリストは無者である。ナッシング、己なしかた、私心なしかた、自我に囚われてないかた。ところが、自分は自我に囚われる。その囚われたる悩める人、それをキリストの御言は、

「幸いだ、あなたは。私の十字架で既に囚われなき姿になっているよ。私の十字架でもって、あなたを囚われから解き放った。そして、復活の我、聖霊の我、汝のうちにある」

と、こう響いてきた。そこから一切の力みが消えた。自分で碎ける必要はなかった。キリストが碎いてくださった。碎いてくださった恵みを、

「はい、ありがとうございます」



とお受けしたら、それでよかった。

「何を力んでいたんだらう？」

「ということになった。お祈りだってそうですよ、力んで「イエスキリスト！」と叫んで、私も昔やってましたよ。」

「イエスキリスト！ 絶対に捕まえてえ！ 今晚、今晚、私を聖霊でボーンとぶっ飛ばしてくれ〜！」

とか言つて（笑）、それでもダメだった。空しかったです、あとが。

「やつぱり今晚もダメか」

なんて。ところが、そんなものではなかった。

「既にお前を解き放つてあるよ。気づいたらいい。気づいたら、もう私はお前の中にいるんだよ」

と。これが先生の後編ですよ、後編の先生はそれなんです。前編とはガラッと変わった。でも、無教会は非常に紳士ですから、非常に理知的に整然と祈る。

「天にまします我らの父よ……」

と、美事にお祈りになる。先生は、「それでは救われん」と思われた。だから、その葛藤がこの1948年、49年の頃です。それが1950年11月3日から5日の九州での手島さん〔手島郁郎1910〜1973〕との集会で、突然、先生は聖霊のバプテスマを受けて、坐ったままバツと50センチほどジャンプして、またドスンと落ちたと仰った。自慢されるんですよ、「私は50センチ上りましたからね」

と言う。私は言うんです、

「ペテロは海の上を歩きましたよ、三歩でしたけれども」

と（笑）。それくらい、先生には強烈だったんですね。それから今度は、東京へお帰りになって、ご自分のお宅で、山上の垂訓のあのところを、

「幸福なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

をずっと瞑想しておられた時に、

「幸いだ、お前、私の十字架で既に霊貧しくされている辰雄よ。聖霊の我、復活の我、汝の中にあり」

と、響いてきた。そしたら、「畳の上に平伏した、全身痺れた」と仰った。それから聖書が楽になった。キリストのどんな言葉もすべてスーツと入ってくるようになったと。だから、このマタイ伝5章3節が小池先生にとっては、天国の鍵です。要するに、

「0=8」（ゼロ・イコール・無限大）〔十字架=聖霊〕

です。この「ゼロ」に成れなくて苦しんでいた小池先生は、既にキリストがゼロにしてくれたという。

「お前はゼロになりたくて苦しんだんだろ。ゼロを上げるよ」



と。ゼロ、そしたら無限大、無限無量である。これが小池先生の「無の神学」ということ。「無」というのは虚無ではない。本当に空っぽになつたところに充満してくるものがある。本当に空っぽになると充満する。

さつき、「砕けは難しくない」と言いました。水泳をなさる方は御存知でしょ。水の中で力んだら沈む。水の中で全身無力になつて投げ出したら浮くんです。小池先生は水泳の名手ですけれども、よく仰つた。

「ご婦人方は浮きますよ、脂肪が多いから」

と（笑）。私みたいに骨と筋肉だけの人間でも、無力に徹すればやつぱり浮きます。でもそこへ空気をまた入れてやらないと沈むけれども、まあ浮きます。昔から言うんです、

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」

という言葉がある。水に飛び込みますね、もう無力に徹してダラーンと全身脱力状態になつたら浮いている。「助かりたい！」と、もがけばもがくほど沈んでいく。だから、

「己に囚われたらダメですよ」

ということなんです。禅のお坊さんたちが目指しているのはそれだと思う。己に囚われたらダメですよ。頭で定義したらダメです、身体です、全身です、全存在ですよと。

宮本武蔵だつてそうなんです。始めは

「強くなりたい、強くなりたい」

ということをやっている。でも、お坊さんたちは、

「なぜ、そんなに強くなりたいんだね、お前は？」

と、柳に風と流しています。だから、宮本武蔵も段々修行して、本当に己から外れていく。脱我です。自分から外れる。そういうときに新しい境地が開かれる。

私は学生のころ、「姿三四郎」というのが好きだつたんですよ、富田常雄著『姿三四郎』の本。講道館柔道の始まりです。矢野正五郎という人が主人公になっています。学習院の先生、嘉納治五郎かのうじごろうがモデルだと言われています。学習院の先生でありながら、いわゆる「柔術」とかいうのではなくて、「柔道」、道を求める。日本人は古来からみんな道を求めた。道を体得するためには、どんな修行でもいとわない。大体、戦国時代なんていうのは、命が、明日がない。非連続の連続でしょ。そういう死に直面している人にとっては、心の平安、無心の境地、これしかない。それを求めて、座禅を組んだり、いろんなことをやった。そういうものが入り入れられて、武道の方でもやはり、剣道とか柔道とか、そういうものが残りました。そういうのもテクニクではない。人間の生き方そのもの、人生そのものだと。そういうことで、柔の道やわらを嘉納治五郎が始めたわけです。剣道だつて、きつとそうだと思う。あのフェンシングというのはテクニクだと思えますけれども、本当の剣道というものはそういう心、体、霊、みな一つとなるような、構えただけで隙すきがない、どこからも打ち込めないという、凜りんとしたものがある。そういうものに日本人は憧れるんです。私は姿三四



郎に本当に憧れていた。結局、無心の境地。自分でもない、他人でもない、本当に無者の姿に徹するということです。

小池先生は、それがキリストにおいて現れているという。我々はキリストのような無者に、無の境地になれない。キリストはそれを下さる。全部受ける。雨が上から降ってくる。我々は全身で雨をいただくだけ。太陽が、光が向こうから降ってくる。それをいただくだけ。攻めていく姿勢から、受けとる姿勢に変っていく。本当に受けとったら、今度は活動的になる。本当に内側が充電されていきますと、動き出していく。そういう静・動、動中の静、静中の動。本当の武者者だったら、寝ていても何か人の気配を感じたら、パツと起きるでしょ。そういうふうなことです。

● 惨憺たる自我

では、本論の方に入ります。この論文を要点だけ見ていきます。これをお書きになったのが1948年、戦争が終って3年目、みな「一億総懺悔^{ざんげ}」ということを言っていた時代なんです。ところが、いろんな敗因を皆さんは指摘しました。

「いや、科学的な精神が足りなかったんだ」

と。竹槍でアメリカをやつつけるんだと言って、竹槍の訓練をしたとか。本気だったんです。女性はみなもんぺ姿で八巻しめて、

「鬼畜米英をやつつけるぞ!」

と言って、掛け声かけてやっていた。そういう非合理的精神だった。戦争となったら、ああいう国力の軍事力の優れたアメリカに対して、日本は本当に立ち向かえるのか冷静に計算すべきだった。ところが、「精神力で勝つ」という、

「神国日本、日本には爆弾なんか落ちるはずがない」

と、私の親父も言っていました。それが愛国者だった。

「これはもう日本は負けますよ」

なんて言ったら酷い^{ひど}目にあう。「非国民!」と言われる。精神主義なんです。そういうものを反省するとか、いろんなことがあるわけです。たとえば、アメリカは、日本と戦争が始まりそうになると、日本語教育に力を入れる。日本は、

「敵国の言葉を使うな! 野球という球技は禁止!」

という、精神主義なんです。ところが、アメリカは「敵を知れ」ということで、日本語を徹底的に勉強する。そして、暗号なんかを全部、解読した。

「そういう科学的精神を失っていたからダメなんだ。だから科学でいかなくは

経済を、文化を豊かにしなくては」

と、いろんなことを言って、戦後、ゼロから立ち直ったんだけれども、心の方だけは徹底的に退けた。その結果、本当に人間としての在り方を問うというところは消えてしまった。



そのことをちよつと言っている。それから入ってきたのが社会主義思想です。

『衣食足りて礼節を知る』というから、ひもじい人間に道徳を説いたって無駄だ。豊かになれば、盗もうなんていうことは起こらない。豊かになれば、人を殺すなんていうことは起こらない。先ず豊かになりましょう」

という。そして、

「資本家は労働者の敵だ。徹底的に資本家から取り戻さないといけない。資本家たちは私たちの労働力を搾取さくしゅしている」

と言つて、階級闘争をやります。そういうふうな思想がずっと蔓延はびこりますと、殺伐さつぱつとした雰囲気でした。そして高度生長を遂げました。けれどもその後、人間の心の世界はすっかり忘れられた。この1948年頃はまだスタートしたばかりですけれども、先生はそういうものの中で、

「いかに社会主義を唱えようと、いかにいろんな我々人間をとりまく外側のものを論じても、それで本当の個人の人格、魂、その問題をそつちのけにしたらダメだ。個人の魂の問題とこのはいついかなる状況においても絶対に捨ててはならないものだ」

ということをここで強調しておられる。

「何となれば、社会を形作っているものは一人ひとりの人間である。一人ひとりの人間が社会を作っている。その人間が腐っておれば、外側はいくら立派にしたってダメだ。逆に、人間が本当の人間であれば、外側はどんなに見すばらしくても決して滅びはしない」

という、一つの確信のようなものです。そこで先生は、

「人間はいかなる時にも常に曠野を持たなければならない」

と。曠野あらのです。日本だったら、お坊さんたちが修行する所は、そういう曠野であつたり、山の中であつたり、深山幽谷、そういう所へ独りわけ行つて、時には滝に打たれたりしながら修行します。

イスラエルの民はやはり曠野で——イスラエルは大体、砂漠です——砂漠、荒野で神さまに出会っている。だから、いわゆる文化文明の華やかな繁栄の中に神はいない。神さまを見つけるとなつたら、人の世界から離れた所で神さまと対面する。そういうことが大事だから、どんなに都会の華やかな環境の中においても、自分自身の中にこの曠野の面を持たないといけないということを先生は言つておられる。

「個体の曠野面」というのが270頁に出てきます。この「曠野面」というのはどうということかという、「終末というものを自覚する」ということなんです。個体としての終末、それからこの人類の歴史の終末。これをたえず目の前に置いて、そして人間の在り方を考える。これを絶えずどんな時にも忘れてはいけないということをここで強調しておられる。



それから、

「自分自身というものを顧みたら、実に人間というものは惨憺たるものだ」

ということが、274頁に「惨憺たる自我」とある。曠野に出て、そこで修行しようとしても、人間というものはなかなか自分というものに囚われて、そこから脱け出せない。善を欲しても善を全うできないし、意志的に「こう在ろう」と思っても、実際は自分の中に逆らうものがあったて、理想をかかげてもやっつけていることは逆になってしまうという、そういう人間の惨憺たる姿をこの274頁で書いておられます。

《第三章 砕けの神学基礎論—終末の実存

惨憺たる自我

……残念ながら現実の人間は、具体的な個体は、単なる実践理性の自律体ではなく、道徳的に敗れる惨憺たる自我であって、そのみじめさ、みにくさは実に自らもてあます態のものである。》

よく、先生は仰ったですよ、

「どんなに世間で立派な人でも、文化勲章をもらったりいろんな褒美をもらう方でも、結局は自分自身を皆もてあましている。表面づらは整ったように見えるけれども、一皮剥いでみたらみんな自分自身をもてあましている。見せないだけだ」

と。それはそうですね、段々老いが迫ってきました。過去の栄光はあつても、現在はどうかという、段々衰えていきます。衰えていくということは寂しいことです。過去の栄光だけでは生きてられない人間。過去の栄光をふりかざすと、「また、始まったか」といつて（笑）、誰も相手にしてくれない。それが人間の寂しさです。では、せめて道徳的に立派で、凜として生きられたらいいんだけど、それで道徳的にも苦しむんだと、そういうことになってきます。そういうことをここで書かれている。

● 鉄壁の破砕

人間は神を求めようとしています。しかし、なかなか自分自身の中の壁が厚くて、この壁が破れない。「鉄壁」と書いておられます。それは278頁の「鉄壁の破砕」の所です。

《鉄壁の破砕

それならば神はいずこに？ 神を求めつつも得られない神は、この世界内的な厚壁の次元の外に在り給う。この次元を越えた絶対次元の神でなくどうしてこの世界を創造したということを得るであろうか。しかもこの神は人間が自ら砕くことの出ないこの壁を完全に或る一ヶ所を通して砕き給うて、人間に近く低く自らを現わし給うたのであって、この下降の神にこそ我々はいつ、いずこでも面接することが出来るのである。我々はかく求められ、呼ばれているのに、そっぽを向き、耳を傾けないのである。これを罪責というのである。それならば世界という牢獄の鉄壁はどこでう



ち砕かれているのか。かのゴルゴタの十字架上で！ その外の何処においても。我々の求めつつあったものも、こともいのちも

「ものもこともいのちも」と言いますのは、人間はいろいろ音楽も欲しかったり、哲学も欲しかったり、いろんなことを求めるけれども——「もの」が感覚的なもの、「こと」というのは理、ことわり哲学的なもの。それからそれだけで人間は満たされないから、「いのち」という生命そのもの——それは道徳を通して、あるいは宗教を通してとなってくるけれども。それで修行を要求してきますと、人間はまた達せられない。というわけで、

こともいのちも人間の一切の要求が結局自己追求であることを

命が欲しいというのも結局は自分を何とかしたい、自分を守りたいというところから来る。自分は死にたくないとか。

結局は自己追求であることを知らしめるもの、そしてそのかたくなな心をうち砕くもの、人間が神の意志を求め得ないで自己を求めているということ徹底的に指摘するもの、これが十字架である、キリストの十字架であったのだ！ 「おのが生命を憎まずばわが弟子となることを得ず」というイエスの畏るべき命題！ いかにしておのが生命を憎み得るか、ただ十字架において砕かれるときにのみ！

世界の大鉄壁は実にこの我々の一人一人がその主我的な、かたくなさを以て築きあげたものであった。「我れキリストと共に十字架につけられたり」とパウロと共に告白することが出来たとき、我れの一切をゴルゴタの十字架にあげわたしたとき、世界の大障壁がぶつ、飛んでしまつて、この大宇宙は「創造の日の如く」（ファウスト）何たる美しい相を呈してわが眼前に展開してくるではないか。「万物の呻き」はなお消し難き現実ではあるとも。》

● 十字架の砕け

そして、「十字架の砕け」です。

《十字架の砕け》

世界の設は一ヶ所に於て砕かれた。その砕けが十字架のイエスである。ギリシヤ的な知には十字架のイエスは躓きであると余人ならぬ。パウロが喝破した、パウロは実にヘブライとギリシヤの両世界を身親しく体験し、その交錯の中心に立ち、自ら砕かれたのであったから。ダマスコ途上の復活のキリストにぶつかつて彼はうち砕かれた。その全人をひっくりかえされたこのパウロの上にこそキリスト教はうち建てられたのである！ 宜^うべなるかな、テサロニケのユダヤ人たちが「天下をくつがえしたる彼ら者ども」とパウロ等のことを言いたるは。凡夫といえどもキリストに打ち砕かれた者は天下をうち砕く力を有つ者である。現実の十字架を見た弟子たちは四散したが復活のキリストに遭つて魂をゆりうごかされて立ちあがった。キリストにこそ真の生命あ



るを知り、その生命にあずかるを体験したからである。しかし復活を端的によるんだ弟子らは喜びに甘んじて十字架のキリストを深く体験しなかったのではないか。それゆえエルサレム本山教団にはユダヤ主義の残滓ざんしがあった。これに反して、復活のキリストにひっくりかえされたパウロは「キリストが復活し給わなかったら汝らの信仰は空しく、汝らはなお罪に居るだろう」(第一コリント15・17)と復活を強調しつつも、「イエス・キリスト及びその十字架に釘づけられ給いし事の外は汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めた」というパウロであった。正直のところパウロの信仰の土台は何といっても十字架にある。彼があればほど十字架を徹底的に絶叫してくれなかったら、福音はどうなったかとさえ思われる。いのちといっても、罪のゆるし、罪よりの解放なくして何のいのちか！

人間の苦悩が死という終末を負う限り、この苦悩の根源たる罪よりの解放の徹底性がなくして、たとい自然的不死が得られようとも、そんな不死は永遠に生ける屍に過ぎない。反之これにはんし、罪よりの解放があるならその次の瞬間に肉体は亡びるともその人は永遠の生命を得ているのである。それゆえ十字架が絶対に必要なわけである。十字架で人類の罪をうち砕き給うたキリストが、十字架で人類の罪を完全に負い果せたキリストが、陰府よみに降り、復活したということは霊的な具体性を有った啓示的事実である。》

ここが大事ですよ、「霊的な具体性を有った啓示的事実である」と。「歴史的な事実ではない」と逆にいったら言える。歴史的事実というのは証明が必要です。十字架の死、これは証明される。たくさんの方が目撃しましたから。けれども、十字架でキリストが死んでいるというのとは、一つの出来事ではありません、その隠されている意義、そこに何が隠されているかということは、これは啓示の事実として受けとらないとダメなんです。その十字架の死が私たちの罪を背負っておられるという、そういう奥深い意義、奥義ですね。

「十字架の死が私たちを生命の世界へ導いてくれる門であった、突破口であった」と。そういうことは、人間の理性ではわからない。歴史的な事実としては何も答えはでてこない。だから、それを「啓示の事実」という。

「啓示」というのは誰が下さるかというのと、一人ひとりの魂にそれを示して下さるかと言いますと、聖霊というお方が一人ひとりに示される。だから、聖霊というお方が皆さんの中に宿りくださいますと、

「あつ、十字架というのはいくらもそうしたことだったんだ」

ということが人から言われなくとも納得できる。逆に言いますと、聖霊さまが来てくださらなければ、いくら頭で理解しようと思っても、それは無理していることになってしまう。

それは皆さん、我慢してお待ちになれば必ずストンとわかる納得できる時がきます。でも、答えは出てしまっている。この十字架で皆さん一人ひとりが完全に贖いきられて、もう皆さんは救いの中に入れられてしまつて、聖霊さまはもうそばまで来ておられる。



「あつ、そうでしたか!」

と気づいた時にはストンと入つておれる。スーツと入つてこられる。そういう世界です。ですから、この十字架も「啓示の事実」というんです。歴史的事実であると同時に啓示の事実です。復活ということは、歴史的な事実かどうかもますますわかりません。目撃者がなかなか少ないものですから。しかも、キリストの復活に出会った人は、ある人は「見た」と言うし、ある人は「見てない」と言う。つまり、霊の目が開かれた人にだけ見えている。そういうことですから、歴史的に証明不可能です。だから、ここに

復活したということは霊的な具体性を有った啓示的事実である。決して神話的、奇蹟的事実の故に事実であるというのではない。

「奇蹟が起こった、それを信ずる」というのではないと。小池先生は言いました、

「キリストがああまぼゆの眩い霊体で現れて来られたというのは当然中の当然だ。キリストが出てこなかったらどうするのか。あの神の生命——人の罪を負いきって、自分を犠牲にして、そして陰府よみにまでくだり、神に執り成しを献げ、愛して愛して愛しぬいた——そういう素晴らしいキリストという生命がそのまま死につばなしならば、そんなことは全く不合理そのものだ。合理主義者たちがその合理を言うなら、キリストの復活という事態ほどの合理性を持ったものは世の中に存しない」

と、そう仰るんです。私は、そのことを1961年3月の復活節に西ノ宮の教会で先生が話されたのを聞いて、驚いたですよ。

「ああ、そういうふうを受けとるのか!」

と。私が宣教師に導かれたときには、

「聖書にこう書いてあります。奥田兄弟、これを信じますか?」

「いやあ、なかなか信じがたいんですが……」

「あなたは不信仰です、ダメです!」

「はい、私は信じます」

「あなたはよろしい」

と。人間が主観的に信じれば、セーフ、合格。

「いや、なかなか信じられない」

なんていうと、

「あなたはまだまだダメですね」

と言う。無理やりに信じなかつたらいけなかつた。私のかつての、そういう宣教師という方々は——善意の人々なんです、善意の人々なんですけれども——その方々は、

「聖書にこう書いてある。だから、間違いはない。あなたはこれを信じなさい。信じられないなら、不信仰です。不信仰は悔い改めなさい」

とこう言ってくる。



● 十字架と復活

それを小池先生は、

「聖書に書いてなくたって、当然だよ。聖書に復活を現す記事が何一つなくても、私は復活は当然だと思うよ。あのイエス・キリストがこの霊体の眩い姿で出てこなかったらどうするんだい。こんな不合理なことがあるものか」

こう仰った。私は「これだ!」と思った。神さまの世界は正に合理です。その合理は哲学的合理でないかもしれない。霊の合理性、霊的な法則、霊の法則に適った事柄が展開していく。これだと思ったですね。

だから、皆さん、「無理やりに信ずる」とか、そんなことは要らないですよ。ごく自然なことなんです。聖霊さまが一人ひとりの中にお宿りになったら、皆さんは家主さんですよ(笑)。聖霊さまに宿っていたら、無私になっていただいたら、自然とそれが、聖書を読んでも「うんうん、なるほど、なるほど」と、何か凄く……「読めてくる」

それを全部、皆さんが味わっていただきたいと思います。先生がそういうことをここで仰っているわけです。

そして今度は、「十字架と復活」という所、281頁です。

《十字架と復活》

十字架と復活という啓示的事実は——十字架も単なる事実ではない、宗教的天才の殉教の死という事実ではない——楕円の二焦点の如きものである。……

かたくなは人類の歴史と共に古く、人類の歴史と共に続く悲しむべき事実である。頑くなの民イスラエルは正にその頑くなさの故に選ばれた……》

というのは、どうして神さまはキリストをお遣わしになったか、ということをやつと辿つてこられる。イエスがどうしておいでになったかというのを、282頁に簡単に書かれています。イザヤ書53章の預言とか。そのへんは飛ばします。

● 終末的現実

そして、283頁に行きます。この「終末的現実」という所は大事です。ルターが宗教改革をやりました。そのルターの宗教改革というのは、当時のカトリックの姿が聖書に反しているということ、どうしても良心の声をあげざるを得なかった。彼は学問的良心に従って、自分が聖書に照らして疑問と思うところを95個並べた。「95箇条の提題」という。それを教会の門に貼り付けた。それが始まりになった。その第1箇条がこうだった。

《終末的現実》

ルッターがかの九十五箇条の第一条でこの命題をとりあげ、「イエスが汝ら悔い改めよと言われたとき、基督者の全生涯が悔い改めであるべきを命ぜられたのである」と宣したのは正に至言である。》



つまり、一時的な悔い改めではない。生涯を通して悔い改めるものである。しかも、悔い改めというのは、人間がいくら悔い改めたって不徹底だ。結局、キリストに我々の生涯を引っくり返りしていただかないと、本当の悔い改めなんてできっこないという、そこまで先生は言われる。ただ、ルターにおいてはまだ終末的自覚がやや薄かったのではないかというところをここで指摘されます。

といいますのは、カトリック教会は固い扉を開かれたというか、砕かれたんです。そして、新しくプロテスタント教会が生まれました。ルターの教会も生まれました。けれども、ルターの教会もまた一つの教会主義に陥ってしまったという。「サクラメント」「秘蹟ひせき」といいますが、けれども、「洗礼」と「聖餐せいさん」の二つを残した。カトリックなんかは七つほどあって、「結婚」もサクラメントの一つですし、その他いろいろあるそうですけれども。ルターは二つを残した。そして結局はまた「教会」という、教会主義的なものになってしまった。これは次の「無教会神学論」の所にもっとハッキリと出てきますけれども、何かそういうように、ある意味では不徹底だったということが言われます。何が不徹底かというと、この非連続の連続、この終末の自覚において欠けるところがあったのではないか。なるほど形の上で、教会の改革はできあがった。聖書中心ということもルターは言いました。

「私は聖書の上に立っている。教会という権威の上には立たない。ローマ法王の権威ではない。私は神の権威、これは聖書に表れている。聖書が私の拠り所だ」

と。それは正しかったけれども、人間の姿としてはやはり、たえず個体としての終末、死に直面している。それから、歴史の終末に直面している。この「終末」ということを深く自覚することから、日々新たな歩みというものが始まるという、この緊張関係です。それがややぬけてきますと、何か教会制度というものをずっと固く守って、教会の信条というものを大事にして、そしてずっと永遠に続けていくような、自己保身的な姿がどうしても出てくる。こういうところをここで指摘しておられるように思いました。

この283頁の終りから4行目の所から読みます。

《福音は時が満ち、時が迫り、終末時が切迫した現実面において唱えられたものであったからであり、福音それ自体がむしろ終末時を現せしめる性格を有つものであるからである。何となれば、失われた人間は終末、死、神の審判につねに直面しているのであって、これを救うものは絶対に他なる啓示、永遠を担える福音、この終末面にかみかかると救いの手でなければならぬからである。このような福音の烈しさにぶつかってはじめて実は人間が終末的存在であることを真に知るのである。人間の現実はいかにも終末的構造の中にあるのである。その人の自覚如何にかかわらず、人間は実は福音につねに新たに問われている終末者、極限者なのである。》



●「ギンをえす」

それから次の「ぎるをえす」という所のくだりは、ここはおそらく現在の先生ならこういうふうには仰らないと思うような内容です。「決断の行為だ」ということを書いてある。「信仰というのは決断だ」と。左することも右することもできる。ところが、自分は右の方の道へ行く、あるいは真つ直ぐな道を行くという、自分で意志的に決断してそこへ飛び込んで行くという、そういういわば意志的な行為だということ強調しておられる。

《ギンをえす》

……人間が十字架において碎かれるのか、碎かれざるかは人間最大の問題である。碎けはこのように人間存在の全く終末的な決断の行為として、終末的な恩恵の迫力として自覚されねばならない、世界的限界と眞の絶対次元の世界との接点である。

と、こういう難しいことが書いてある。これは「終末的な恩恵の迫力」で充分ですよ。その前に「はい、主さま、お願いします」と、これでいいんです。

「はい、私は碎けませんから、主さまの碎けをいただきました。ありがとうございます
ます」

と、これでいいんですけれども。

「私は碎けるぞー」

と、いつて何か決断してやっていくという、この辺が先生の非常に、この頃のまだ人間の側に何かを求めようとするものが残っているように私には思えた。

我らの平面的時間的存在に、垂直に十字架を立ててつかみ込んで来た神の行為、これにつかまれる者が、すなわちキリストの十字架において碎かれている自分を発見して、碎かれる人が、初めて終末の実存者となるのである。》

このあとはこれでいいです。キリストの十字架において碎かれている自分を発見して、そして

「あ、碎かれていたんだ。もう碎かれてしまっていたんだ」

と。ところが、「碎かれろ！」というのやはり人間の側であって、これはどうしても力みが出てきます。だから、この辺は先生は本当にもう最後の九合目まで来ておられるんですけれども。ここで「碎け」というのが出てきましたから、「碎けの神学基礎論」という。つまり、碎けということ。先生はいつも仰っていた。

「もしも神さまが人間を二つに分けようとする、それは「宗教を信じるか、信じないか。キリストを信じるか、信じないか」ということでお分けにならない。その人の魂が神さまの前に碎かれている魂か、碎けていない傲慢な魂か。つまり、「傲慢か、碎けか」でお分けになる。別にキリスト教徒でなくても、そんなことは関係ない」

と、そこまで仰るんです。全く既存の特定の宗教を御存知なくても、本当にその魂が幼児



のように本当に柔らかい、神さまの前に「はい」と言える魂なら、天国へほとんど引つ張って行つてくださる。ところが、

「私は無神論だ!」

と言い張っていたら、

「ちよつと、待つて下さい!」

ということですよ。つまり、傲慢の魂はアウト。柔らかい魂、砕けの魂はセーフ。ここに分水嶺がある。その一つの例証として、あの十字架の上の二人の盗賊がいました。一人は最後までキリストを罵りました。もう一人は、

「イエスさま、私のことを覚えてください。私は悪いことばかりやってきました。でも、最後の最期の瞬間に、こうしてあなたさまにお会いできて、本当にうれしうございます。」

そんなふうに詳しくは書いてませんが私も私なりに言うと、

私はこれから地獄へ行かざるをえません。これは私の運命です。みんな私が悪いんです、さんざん悪いことをしました。でも、あなたさまは違いました。あなたは本当に素晴らしいお方で、愛そのものであられた。神さまを大事にして、神さまの御意だけに生きぬかれた。あなたが天国へ行かれるお方なのに、こんな十字架にかかって苦しんでおられるのは本当に申し訳ないことです。けれども、私は今、そういうことに気づきましたので、天国へお入りになったら、「ああ、哀れなやつがあそこに居った」ということを思いだしてくださいね」

と、遂にお友だちになれた。そしてたらキリストは、

「汝、今日、我と共にパラダイスにあり。お前と一緒に天国へ行くからね」

と仰った。これが福音だと、先生は言われた。

「悪うございました。私は今まで間違っていました。本当に引っくり返りしてください。あなたにすぎります」

と言って、心砕けたその罪びとは、人間の法の前には死刑という死罪を免れないけれども、その人の魂はスーッと天へ行く。体を脱ぎ捨てて天に導かれて行く。最後まで神を呪って罵っているような魂はしばらく地獄へ行ってもらう。そこで悔い改めたら、また登ってこられるかも知れない、ということですよ。

それで、「砕け」ということを非常に先生は強調されるようになった。それから「砕けの神学」というのが表面に出てきたわけです。あまりにも人間は簡単に、

「信じて救われる。信仰によって義とされる。信仰、信仰」ということを言ひすぎる。

「私には信仰がある。あなたには信仰がありません。だからダメなんです」とか。そうすると何か、自分の築き上げた信仰がサムシング(何ものか)になる。



「私は固い信仰を持っていますから、ビクともしません。あなたも信仰を強くしてください。」

とか。そういうのを先生は凄く、あるときから嫌いやになられた。

「もうその信仰という言葉はやめたい。もし言うなら、神さまと交わる神交、信ずる人は愛の行為となって表れていく信仰、それならいいけれども、信じ仰ぐ信仰、なんていやだ。」

と。私も全く同感です。だから、私の話の中には「信仰」という言葉はほとんど出てきません。神さまを「受けとる」とか、「いただく」とか、「中へ入っていたいただく」とか、「御霊のまははは私の中にお宿りくださっている」とか、そういうように言います。

●神の実存体たるイエス

そして次に参りましょう。「神の実存体たるイエス」。ここに「実存」という言葉の解説がちょっとありますので、これも見ておきましょう。

《神の実存体たるイエス

神こそは実に実存の実存である。「我は在りて在る者」（出エジプト3・14）との驚くべき啓示の言がそれを示している。神自らの存在が、それ自ら外に立ち出でて（existere）、

「エクス・システレ」というのは、「存在の外へ」ということで、自分の殻を抜け出て外へ出ていくという姿です。

神自らの存在が、それ自ら外に立ち出でて、自己の姿をそこに現じ給ったのが、肉となりし具体的なキリスト・イエスである。神の実存の自己開示が、メシヤたるイエスである。キリストは実に神の実存体である。今生きて在いまし給う霊なるキリストは復活のキリストと全く同一性的である。かの時の現実には正に我らにとっても現実なのである。》

「二千年」なんて、時の問題ではない。あの時の現実が今も同質的に我々に迫っている。時は乗り越えているんです、神さまの世界では。そういうことをここで言われているわけです。

●聖霊の執り成し

それから次に、「聖霊の執り成し」という所です。ここだけです、聖霊」のことが出てきているのはこの論文で。

《聖霊の執り成し

そしてあだかも宇宙線が我らの体内を浸透している如く、聖霊の神は我らの魂に呼びかけ且つ浸透せんとし給う。深い執り成しの神、深い愛の神である。北森氏が「神



の痛み」と言ったが、「痛みの神」は、実はこの聖霊の神において、現実の我々に最も身近く助け手として臨み給う神で、聖霊の神は、罪びとを執り成す神としては、ローマ書で「呻きの神」と言われている(ロマ書8・26)。

この「聖霊の神」という言い方は、後編では出てまいりません。「御霊の主」とか、「聖霊」とか、「神の御霊」とか、そういう言葉を言いまして、「聖霊の神」という表現はまず出てこないと思います。

いわゆる「三位一体論」というのがあります。「父—御子キリスト—聖霊」の三者の関係はどうであるかということ、三位一体」とか言うでしょ。それで「聖霊の神」だということだから、ここで「聖霊の神」という、神の別の姿だということ、聖霊の神」と言われたのだと思いますけれども、もう後編の先生は、そんなことは全く気になさっていない。

聖霊の執り成しあるによって、時々刻々に神に審かれている我々の終末的現在が滅びをまぬがれ、ゆるされているのである。この歴史がなおも一日一日と忍ばれているのは正に聖霊の執り成しによる。我々は聖霊の神の実存のすごさ、情け深さをそこに体感すべきである。何たる必み入る恩恵ではないか。しかも聖霊は同時に白熱的な愛をもって我々のたましいを歓喜せしめ給う。

贖われたる罪人の救はしかし未だ全くはない。魂の最も具体的な祈りであるところの霊肉共に救われる日はいつであるか。それは歴史に終末を来らせる最後の審判の日である。新天地の開示される再臨の日である。その終末的待望はイエスやパウロがその日を「盗人の如く来たる」と言って待ったように、今日なお待たれている。この待望もまた原始基督教徒のそれと同一性的である。》

● 十字架と復活と再臨

そこで次に、三つのことが出てきます。「十字架と復活と再臨」という。ところが、後編の先生、特に晩年の先生は、「十字架と聖霊」と言って、それ以外は仰らない。もう「復活」は省く、あまりにも当然だから。「再臨」ということもあまり仰らない。「十字架と聖霊」——「○の中に十」の印を描く——そういう「十字架と聖霊」に収斂しゅううれんされました。ここでは「十字架と復活と再臨」として、難しいことが出ています。

《十字架と復活と再臨

……この現在の終末と終局的終末との緊帳関係がある。

それ故に十字架と復活と再臨の三つは、我々の一人一人の存在に完了的贖罪とこれは過去からやってきて現在に至る、未来までわたる完了的贖罪、

現在の新生と未来的永生の三時性を終末論的構造において与えるものであり、基督者が終末の実存者として最も迫力あるものを担わせられているわけである。》

ここまででは大体、我々に構造のことを言っておられる。ここから後に出てきますのは「幕



屋論」が出てくる。ごくかいつまんで申しますと、何を仰るかということ、神の国が迫ってきます。我々は神の国の民としてそこに贖いとられた人間です。しかし、生きている世の中は昔も今も変りがない。まさにこの世、罪深い世です。多くの人は罪深い世の中で生活をし、文化的な営みをしている。我々自身もその中で職業を持ち、営みをやっている。そうすると、キリスト者にとっての問題というのはこの世——我々はまさにこの世に足をつっこみ、その中で生活し、その中で生きている——そういうこの世で生きている私たちの生き方、しかもそれを「つまらないものだ」として、除け者^のにしているのではなくて、その中で我々はそれぞれ仕事をし、それぞれやっぱり人が喜んでくれるように、その中で生きがいがあるようにという形で我々は生きている。そういうこの世での営々たる営み、それと我々が終末の実存者として、個人としての終末に面し、また歴史の終末に面して、そこで神さまと取っ組み合いをしています。その神さまと取っ組み合いをしているその神の国の次元と、それからこの世で根を下ろして生きている者と、これはどういう関わりがあるのか。そして、エクレシヤ、神の民として呼び出された者——それは神の民でしょ、神の民でもどこか別の所へ行っているのではない——別世界に住むのではなくて、まさにこの世の中で生きているわけです、我々は。そうすると、この神の民の集まりとしてのエクレシヤ——これを先生は「幕屋」と呼んでおられるけれども——その幕屋はこの世に対していかなる関わりを持つのか。批判だけするのか、それとも執り成して祈っていくのか、担っていくのか。どういう関わりをするのか。これを問題にしておられるんです。要するに、

「執り成しの祈りをして担っていくんだ」

ということが言葉では出てくるけれども、やや抽象的ですね、ここを読みますと。

● 神の幕屋

幕屋の姿をずっと書いて、289頁の終りの所に行きます。終りから3行目から、

《神の幕屋》

……聖書の研究会であろうと、

我々のいわゆる神の国の民としての、この世の面での在り方、集会というもの。

伝道そのものであると、集会であろうと、講演会であろうと、無教會的幕屋が全国各地で動的な活動を福音の迫力のもとに展開してゆきたいものである。文化社会に対してその福音の終末性を以て烈しく入り込んでゆくべきである。そのとき始めて文化を真に担つわざがいとなまれるであろう。

プロテスタントの本質は批判にある。自己批判である。絶えざる自己批判である。自らにプロテストするということが根底だ。その自らに激しくプロテストしつつこの世を批判し、しかもこの世を担っていくんだと、そういう意気込みは凄いですけれども、具体的な内容は何も書いてない。先生は方法を捜しておられるんだと思う。



自己を批判するとは、つねに新たに、十字架の碎けを通してキリストに属つくということの外何ものでもない。

神、キリストを支柱とする幕屋的実存共同体においては人間相互の關係に直接性がなくなる。却てそこに眞の愛の交流があるのである。》

これはどういうことかといえますと、我々の人間關係、この世の文化社会では直接的に人間は人間同志關わりをもつんです。それが、この神の民のエクレシヤでは、キリストを通して關わりをもつ。夫婦だって、キリストを通して妻と關わりをもつ。妻もキリストを通して夫と關わりをもつ。直接對話をしているようであつても、実に眞中にいつもキリストというお方がいてくださる。だから、ヘマをやつても許してもらえらるしね。それでなかったら、本当に大変なんですよ。兄弟姉妹だって、そうなんです。

「あの人は私を傷つけたわ！」

なんていうのは、直接關係ではなかなか和解がしにくい。でも、キリストさまを通しての許しであり、キリストさまを通してのお詫びであるという形できますと、キリストという方がいてくださるおかげで、遂にそのわだかまりも消えていくという、そういう在り方だということが、この「直接性ではない」ということ。人間關係は、直接性でやっていますと、行き詰まります。必ず眞中にキリストがいてくださつて、その方の執り成しの中に、その方の許しの中に、その方の愛の中で人間關係が営まれていきますと、非常に潤滑油に——キリストを潤滑油にして申し訳ないけれども——非常にスムーズにいくんです。そこに感謝が出てきます。

だから、主にありて兄弟を愛する、主にありて妻を愛するという、この「主に在りて」というのが飾りでなくて、現実でなければいけない。それが失せていきますと、とげとげしく、何かギスギスしてまいりますから、ギスギスしてきたらその時は、

「あ、キリストが中にないんだわ。ここにキリストがいてくださらないとどうにもならない」

と思われたらいい。キリストに帰りますと、わだかまりが融けてしまう。そういうことをいくらでも体験しますから。

「あの人はまだ怒っているだろうな」

と思つたら、ニコニコしていてくれたりね、

「ああ、助かったな！」

と思つたり、そういうことがあります。そういうことをここで言っている。

●終末の実存

それから、「終末の実存」、291頁。この辺が、さつき申しましたように、この世との關わりがなかなか難しいところを書いておられる。文化社会の営みを直接肯定してはならない。



いつも神の目で、神の光でそれを批判的に見ないといけないというようなことを書いておられる。

《終末的実存》

……信仰者が見えざる神の国を建てんと努力するのも勿論終末論的に自覚されねばならない。人間の一切のいとなみは断じて直接的肯定をゆるされないからである。万人は罪びとである！……

と、そういうことが書かれている。それから、「碎け」のことが終りの方に出てきて、十字架に徹することあつて始めて霊的復活の力がそこにみなぎるのである。《

「聖霊」が出てこないんです。「霊的復活の力」ということが出てきます。

● 碎けの愛

それから「碎けの愛」、この辺からピークになってきます。

《碎けの愛》

碎けは最も深い自己否定であるから、同時に最も熱いあがないの愛への転換契機、転換動力である。碎けは神の霊生、神の愛の突入であるからである。神のいのちは愛であり、神の意志は義である。「神の義は福音に現われた」といつパウロの告白は、この碎けの場で把握される。

これは難しいことを言っておられる。それから、293頁に行きますと、どの集会の方であろうと、本当にこの「碎け」をわかってくださる方はみな同志である、ということが3行目位から、感嘆符がいくつも出てきます。

友よ！ 主にある兄弟姉妹よ！ 私は同志に呼びかける。

なんだかあの共産党の呼びかけみたいですね（笑）。

同志が教会の中にもあるならば、未信者の中にもあるならば、何をかわけへだてをしよう。偽善なる学者。パリサイ人をイエスは叱責し給った。ただ神の前に心碎ける人であれば、これは我が同志である。神の国のために、真のエクレシヤのために、キリストの幕屋のために、我ら生きようではないか。

それから終りから6行目、

伝道はすべての基督者の義務である。烈しく実存することが即ち伝道なのである。《

「烈しく実存する」なんていう言葉は、私はあまり今は好まないけれども。それから次は、「玉碎・玉成」。これは、社会主義は言いましたよ、「社会主義の細胞」と一人ひとりのことを言った。そして「鉄の団結」と言った。そんなのに負けないぞということをごここで言われる。どうしても向こうは組織が中心になる。個人は軽く見られる。それに対して先生は、「個人だ、どこまでも個体だ」ということを強調されるわけです。

それから次に、「動的なエクレシヤ」。絶えず畳んではまた幕を張っていくという天幕で



幕屋の民、イスラエルの民は絶えず移住しておりました。羊を連れて。だから、あまり安住しない。固定的な場所に安住しない。たえず動いていくという姿を言っておられます。それから次に、「痛みと碎け」。ここは省略します。それから、「キリストの幕屋」。そして、「終末の実存者」の所で、藤井先生は正にそういった終末の実存を生き抜いたお手本だと言っておられます。これは「藤井先生記念講演会」ですからね。そういうことで、かなり端折って来ましたが、先生の情熱は物凄く迸り出ているけれども、ややもすると今から言いますと、

「万国の労働者よ、団結せよ！」

と呼びかけているような(笑)、そういうきらいがありますが、情熱が迸り出ている。それと同時に、「聖霊」という言葉が「聖霊の神の執り成し」という所で出てきましたけれども、それ以外は全然出てこないでしょ。

「十字架—碎け—復活—再臨」

というラインで行っている。それが後編の先生になると、「聖霊」が出てくるんです。聖霊が十字架を示してくださっている。聖霊が愛の方で我々を包んでくださる。聖霊の愛で兄弟姉妹を相いだける。聖霊が

「御国をきたらせたまえ」

と祈らせてくださる。すべて我々の存在の中心に聖霊が来て、この聖霊がすべてをなさってください。私はついて来たらいい、おんぶにだっこで、ついて行ったらいい。そして、聖霊という方は助主たすけぬし、真理の御霊で、すべてをわからせてくださる有り難いお方だと。

「聖霊は言い難き呻きをもって執り成してください」

と。この御霊のよきまは、

「この聖霊をあなた方に上げたい。そのために私は十字架にかかる。この聖霊の火があなた方の中に燃えてほしい。しかし、そのために私は十字架を通らなくてはならない。この十字架を通らないと、聖霊はあなた方に降くだらない」

と仰った。それは我々を潔めなければいけないから。罪から解き放つて我々を宮にしなればいけない。我々を十字架で宮にしてください。そして今度は、聖霊という生命が宿ってください。これは死んでも死なない生命です。そして、我々は肉体が朽ちた時には、あのキリストの霊体をやっぱりくださる。キリストと私たちは同質。有り難いでしょ、同質なんです。キリストはさしずめ長男としたら、我々は次男、三男。キリストは私たちのお兄さんという立場に立ってください。そういうキリストだから、私は慕ってやまない。

「キリストには代えられません」

という〔聖歌52番〕。小池先生は

「御霊には代えられない」

と仰った。皆さんはお宮さんです。一人ひとりがお宮さんです。だから、外へ出て、



「私は宮である。お賽銭を持ってらっしゃい」(笑)

「どこに何が住んでいるの!？」

「私のうちに御霊のキリストが鎮座します」

「見えないよ」

「見えるようなお方ではない」

なんて。いや、本当にそうなんです(笑)。

だから、按手して祈れる。按手して祈るといふ時に、もちろん先生は手を高くかざして、霊界のキリストに手をかざし、それから、内なるキリストが充満してくださっていることを実感しながら手を按いて祈っておられます。天なるキリストがずっと流れて、その方の所へ流れ込んで行くようにと祈っておられる。キリストの生命が流れていくと、病がいつか治ってしまう。その人が本当に根底から癒されるように、罪が赦されるように、そういう祈りを先生はなさっている。それは内に聖霊がいてくださるから、楽になさる。

私たちの生き方、この文化社会に対しての生き方というのは、私はこう受けとっています。この娑婆しゃばの中で私たちは生きる。これがキリストの御意みこころです。ヨハネ伝17章のあの「大祭司の祈り」という所をごらんください。

「私は御許みもとに参ります。彼らはこの世に残ります。だから、彼らを護つてやってください。今までは私が護つてきました。私はあなたの御許に参ります。今度は、あなたの御名の中に彼らを護つてやってください」

と、そうやって17章で祈つてくださっている。なぜ、私たちがいきなり天界へ連れて行かないかという、この世で使命があるからです。神さまに逆らっているこの世、神さまのことをまだ知らないでいるこの世、そのこの世に対して——「この世」といっても、それはみんな人が形作っている社会ですから——その一人ひとりが、たとえ社会が滅びても、その一人ひとりが本当に続々と神の民になるように、

「そのためにお前はこの世にあるんだよ」

と。しかも、直接、「伝道者」といって、皆が伝道者になったり、牧師になるのではない。それぞれの職業を賜って、

「ああ、キリスト者のやり方というのはあんなに素晴らしいんだ。キリスト者がお医者さんになると、こんなに素晴らしいんだ」

というふうに、一人ひとりの仕事、持ち場持ち場に、

「本当に御霊が宿っている人の営みはかくも違うか」
ということが表れてくる。しかもその人は自分を誇っていない。

「私ではない、私ではない。何か私の中に不思議な力が流れてきて、それをやらせてくださっている。だから、讃たたえるなら、そのお方を讃えてください。私ではない。

私はゼロです、私は無責任ですよ」



と。そういう一人ひとりが、家庭の人であれ、どういう職場の方であれ、どんな立場の人であれ、この世に置かれていてる所で、

「あの人は一味ちがう。どういってお菓を飲んでるのだろうか？」

「聖霊を飲んでる。それが染み込んできて、聖霊はいくらでも溢れていく」

と(笑)。それが一人ひとりの中に、他の方々の中に流れ込んだら、もう同類だ、兄弟姉妹だ。そういう「聖霊」を領ち与える役目を私はさせられている。しかも、その聖霊も、神さまも、みんな見えないですからね。だから、私たちのそれこそ生き方、嬉々として喜んでる生きてる姿を見てもらわないと。我々がシヨボンとしていたら、誰もついてきてくれない。

「あんなに生き生きと生きてる秘密は何だろう？」

と、そう思ってくれて初めて、

「よし、それでは一体、どれだけ金を積みばいいんですか？」

「バカッパレ！ 金は捨ててしまえ！ そうじゃない。あなたの心を神さまは欲しがってられる。あなたの心がほしい。あなたの愛がほしい。それはあなたを愛しておられるからだ。あなたを素晴らしい人間に造り変えようと言われてる。人生90歳からのスタートでまだ間に合う。早ければもちろんいい。でも、いつからのスタートでもいいから、大丈夫だから、今からやろう。永遠なんだから」

と。我々の未来、御国の未来の世界というのは無限ですからね。人生は百年ほどです。でも、彼方の世界は永遠ですから、そこへとお招きになろうとして、しかも、そのための尊い犠牲としてキリストご自身が十字架についてくださったというんだから、これはもう本当にありがたい。

さつき、始めにいいました。空気は無条件です。空気を吸うのにお金を払ったりしない。

「あなたがいい人間だから空気を吸わせてあげよう」

とは誰も言わない。みんな無条件で空気を吸っている。太陽の光はみんな無条件に浴びている。お水も、山へ行けば、谷川の水をいただく。そんなふうに、人間の本当に必要なのはみな無代価で提供されている。

自然の話をしますと、みな「そうだ、そうだ」とわかってくださるんだけど。霊、神さまという霊、人を活かす霊である神さまから——人間も「万物の霊長」といいますように本来、霊があつて、その霊が気高ければ動物もなついてくれるんです。霊が気高ければ、周りも潔められていく——我々はそういう尊い霊をいただいた。それがさ迷っていた。それをキリストが私たちの中にお住みくださって、私たちの霊をもう一度甦らせて、キリストの霊と一つになって、

「さあ、これから一緒に行こうね」

と言ってください。それが我々の人生の旅路なんです。



そういうことにお気づきになったら、若い人は本当に若ければ、これからの楽しみです。この世で成功・不成功、そんなことはどうでもいい。キリストが喜んでくださるような人生、キリストに「よかったね」と言っていただけのような人生、「よくやったね」と言っていただけのような生き方。それをすればいいんです。あとはキリストが責任を持たれる。

「何を食べようか、何を飲もうか。生命のことで思い煩うな」

と。そうなんですよ。だから、不景気であろうと何であろうと、表面的にはいろいろ辛いことがありでしょう。けれども、そんな時こそチャンスだと。そんな時こそ本当にキリストという方をお迎えして、そこで新しい出発をしていただくというチャンスです。

世界の情勢は大変ですよ、イラクの問題にしても、北朝鮮の問題にせよ、心痛むことばかりです。事故の話やいろんな心痛むニュースがどんどん流れてきてます。そんな中でも、本当にキリストという光は絶えず出てます。陽は射しています。そういう中に身を委ねる。そして新しい生き方をしていく。私たちの生命というのは決して保証されていない。非連続なんです。非連続の中で永遠なる方にお会いして、その方と一緒に非連続の連続を積み重ねて、そして終りが来た時にキリストさまがいてくださる。

それが決して年老いた人の儂い夢はかなではないんです。若者こそがそういう夢をいっていて、力強く新しいリーダーとなって、この世を引っ張っていつてもらわれないといけない。これが私は、エクレシヤというものがこの文化社会に対して果たす役割だと思っている。

●法曹倫理の根底にあるもの

私はどこへ行きましても、こんな話をする。今度、5月16日にまた司法研修生が1200人新しく入ってきます。1200人に講義を頼まれている。法曹倫理、法律家の倫理、これがテーマです。私は「法曹倫理の根底にあるもの」という題にしようと思う。

「まず本当の人間でありなさい。本当の人間とは何か。そこに目覚めなさい」

と。裁判官はどうすべきか。弁護士はどうすべきか。検察官はどうすべきか。これは各論のお話はそれぞれの専門家がなさるので、それに任せる。私は、

「法律家も本当の人間という自覚を持たないとダメだ。人間とは何ものか。あなたが偉いから裁判官をやるのではない。自分が偉くて、自分の判断で人を裁くなんて、そんな思いついたらダメだ。誰かがこの役割を担わないとしようがないから、担わせていただく。あなたが偉いから罪びとを弾劾するのではない」

と言いたい。私は、

「刑事裁判なんてクリスチャンがやっていいのかしら？」

なんて、悩んだことがありますが、クリスチャンになった時に、

「人を審くな」

と書いてあるでしょ。「人を審くな」というのに、死刑を宣告するとか、懲役何年とか言い



渡す。そんなことが出来るのかしらと思った。でも、それはこの世がこの世として秩序をもつて平穩に生きるためには必要なことだ。その役割を誰かが担わないといけない。誰が担うか、公平無私な人でないとダメだ。依怙^{えこひいき}鼻^なをしたりする人が裁判官になったら困る。法というものは神聖なるものであつて、その法を正しく適用して、法において有罪なら有罪ということ^をを宣告する。これは本来、神さまがなさることでしょうけれども、それを人間が代わつてその役割を担わされるだけであると。私はそんな気持ちでいるんです。ということ^は、人間は徹底的にやはり謙虚でないといけない。目線が同じ人間の目線でないといけない。けれども、

「止むなく役割として、私は裁判官、あなたは被告人、こういう形になってしまつたけれども、同じ人間なんだ。だから、今度は立ち直つて、新しい人生を歩むんだよ」

と。刑事裁判の宣告をした後、ずっと判決理由を述べて最後に論^さす時間があるんです。若い人だったら、

「もう一度、新しく出直すんだ。立派な人間になつて世の中に出て行くんだよ」とか言つて、論^さすところがある。そんなことを説教調でやったつて、聞いてくれませんか。本当にその裁判官の人柄がそのときに表れてくる。

「ああ、この裁判官の言うことなら、本当に受けよう」

という、一つの人格的な力です。その被告人とされた人が——過去の罪に対しては刑罰は仕方がない——しかし、それを乗り越えて新しく人生を歩み出していく時に、

「ああ、裁判官の言つてくれた言葉、あれで行こう」

とか。そういうふうな裁判官であつてほしいなと私は思う。弁護だつてそうです。何でもかんでも被告人のためにやるだけが弁護ではないと思う。やっぱりその人を本当に活かす。不利にならないように、裁判に誤りがないように、精一杯のことをやる。しかし、黒を白と言いくるめるのが弁護だと思わないでいただきたい。

そんなふうに、人間というものが裁判官、検察官、弁護士という、法律家という非常に重い仕事に携わる時にも、結局は人間だということを話したいなと思う。

そんなことで、時間をだいぶとつてしまいました。これで終りいたします。

